



暑寒別岳

希少な高山植物や湿原が広がる
暑寒別連峰の秀峰

暑寒別連峰の主峰、暑寒別岳(1,492m)は、平成2年(1990年)に指定された暑寒別天売焼尻国定公園のシンボルとして四季を通じ、美しい姿を見せています。周辺には群別岳(1,376m)浜益岳(1,258m)雄冬岳(1,198m)南暑寒岳(1,296m)など1,000m級の山々が連なり、暑寒別岳連峰を形成しています。

暑寒別岳と群別岳、南暑寒岳は「暑寒別火山」とも呼ばれているように、地下のマグマの活動で隆起したものが、長い年月をかけて雨や風、川の流れなどによって削られながら、現在の形に変化してきたと考えられています。隆起の中心となっていたのは暑寒別岳の西南2.5km地点付近とされ、ここでは安山岩(マグマが地表近くで冷えて固まった岩石)の溶岩石も確認されています。一説では今から約180万年前、「第四期」の初め頃に誕生した山ではないかと言われています。

暑寒別岳の美しさは山麓から山頂に至るまで、神秘的な原始の姿を残している点にあります。増毛側から望む山麓には原始林が広がり、広大な樹海や高山植物の群落が登山客を魅了してやみません。特に、高山植物は暑寒別岳の固有種であるマシケゲンゲやマシケオトギリをはじめ、チシマギキョウ、エゾシオガマ、チングルマなど百十数種類が群生し、6月中旬から7月下旬にかけて見頃を迎えます。また、山頂からは東に大雪連峰北は日本海という雄大な景観を一望することができ、晴れた日には日本海に浮かぶ利尻富士の姿も見ることができます。

見どころ

暑寒別岳の山開きは例年6月中旬。登山ルートは増毛町側の暑寒と箸別ルートと雨竜町側のルートがあり、雨竜町側から登ると、標高850~900m地点で「北海道の尾瀬」と言われる雨竜沼湿原を通ることができます。

ポイント

暑寒別天売焼尻国定公園は全国で5番目、道内では5番目に指定された日本最北の国定公園。暑寒別ルート登山口の山小屋「暑寒荘」周辺にはチップが敷き詰められた遊歩道が整備された「溪流の森」があり、気軽に自然と触れ合うことができます。

五感で感じる！風土資産の魅力



登山小屋の暑寒荘周辺には、気軽に野鳥の声や溪流のせせらぎを楽しむことができる溪流の森があります。チップ材が敷き詰められた遊歩道は四季折々の表情を見せながら、快適な散策が楽しめます。



暑寒別山の山開きは、毎年6月中旬に行われます。安全祈願祭を実施し、翌日には早朝から記念登山を行います。例年多くの登山客で賑わうイベントです。

■基本情報 (R1.5)

【増毛町暑寒野営場】
住 所：増毛郡増毛町暑寒沢830番地
開設期間：6月上旬～10月下旬
駐 車 場：約30台(無料)
キャンプ場：有(オートキャンプ不可、バンガローなし)
施設・設備：水洗トイレほか計3棟、炊事場1カ所、暑寒荘(60名収容、トイレあり)
問い合わせ：増毛町商工観光課観光事業係
TEL 0164-53-3332



暑寒別川

流域に多くの恵みを与える
豊かな水量を誇る二級河川

暑寒別岳(標高1492m)を源流とする河川は北の方角へ暑寒別川、箸別川、信砂川、東へは恵岱別川、尾白利加川、西南に徳富川があり、豊かな自然を形成しています。暑寒別天売焼尻国定公園内を流れる暑寒別川の本流は増毛町市街地を流れ、やがて日本海へと流れ込みます。

暑寒別山系は最高峰の暑寒別岳をはじめ、群別岳、南暑寒岳などの山々が連なり、このうち南暑寒岳の東側には大小150もの池塘(ちとう)が点在する雨竜沼湿原が広がっています。標高約850mの恵岱別溶岩台地上に発達したこの湿原は東西2km、南北1kmにわたって広がる山岳型高層湿原で、中央部をペンケペタン川が東西に蛇行して流れ、水面上には浮島も見られます。ここを発するペンケペタン川は落差約36m、幅約5mの飛瀑、白竜の滝を經由して、尾白利加川に合流しています。

一方、雄冬、岩老方面は雄冬山や天狗岳などの山塊が日本海に迫る海岸は、100m前後の断崖が海に面し、河川も数kmの短い川が何本かあるだけになっています。

暑寒別川はサケの遡上する川としても知られ、毎年9月下旬～10月中旬、河口付近ではふるさとの川に帰るサケの姿が観察できます。暑寒別岳、そして、暑寒別川の豊かさが雨竜沼湿原を形成し、その豊富な水量で地酒醸造や果樹栽培など、この地域に多くの恵みを与えています。

見どころ

平成17年(2005年)にサムサール条約登録指定湿地となった雨竜沼湿原は、東西2km南北1kmにわたって広がる湿原で、広さは約100ha。約3.8kmの木道が整備され、約150種もの植物や池塘を眺めながら一周することができます。

ポイント

暑寒別川の豊かな水は私たちの暮らしに多くの恵みをもたらしています。増毛町の國希酒造は暑寒別岳の伏流水を仕込みに利用している銘醸で、増毛の特産品のリングオやさくらんぼがたわわに実をつけるのも、この川の恩恵といえます。

五感で感じる！ 風土資産の魅力



暑寒別天売焼尻国定公園内を流れ、様々な河川と合流し、豊かな水辺を形成している暑寒別川。せせらぎの音を聴いてみましょう。



サケの遡上で知られる暑寒別川。毎年9月下旬～10月中旬に、河口付近でサケの姿を観察することができます。暑寒別川のもたらす自然の営みに触れてみましょう。

■基本情報(R1.5)

種別：二級河川
問い合わせ：増毛町役場商工観光課
〒077-0292
北海道増毛郡増毛町弁天町3丁目61番地
TEL:0164-53-3332



るもい風土資産カード

元陣屋 (総合交流促進施設)

増毛の侍文化を今に伝える
町民の交流の場

増毛町役場に近い町の中心部に位置する「元陣屋」は「増毛町総合交流促進施設」として町民に開放されている、増毛町の歴史を今に伝える施設の一つです。

蝦夷地(現在の北海道)周辺では18世紀頃からロシアが南下して、漁場を経営していた日本人と衝突するなど両国の緊張が高まります。この結果、幕府は東北諸藩に蝦夷地の警備を命じました。安政2年(1855年)に秋田藩が増毛での警備を命じられ、翌年に元陣屋が建てられました。元陣屋の「元」は拠点という意味で、現在の増毛町の永寿町一帯がその跡地です。秋田藩は宗谷と樺太にも陣屋を築いて警備に当たりました。こちらは「出張(でばり)陣屋」と呼ばれ、夏の間だけ警備を行い、冬の間は増毛に戻ってきて越冬しました。秋田藩は足掛け12年間にわたり、警備と開拓に当たりました。ロシアと交戦することはありませんでしたが、建物は非常に簡素な造りで、冬の間には多くの凍死者や病死者が出たといわれています。原因の多くは冬季間の野菜不足による水腫病(現在の壊血病)といわれており、多い年では一冬で30人以上が病気で命を落としています。

その跡地に平成7年(1995年)、増毛町が総合交流促進施設「元陣屋」を建設しました。施設内の郷土資料室では当時の様子や増毛町の侍文化を学ぶことができます。このほか図書室や会議室、多目的ギャラリーなどがあり、町内外の方々に生涯学習・文化発信の場としても利用されています。

見どころ

施設内の映像体験室では、当時の警備の様子を約8分間にまとめた解説映像を鑑賞できます。また、郷土資料室には解説パネルや古地図、ジオラマなどの資料が展示されています。当時の建物の一部も復元されていて、厳しかった暮らしぶりをしのべます。

ポイント

郷土資料室には鎧(よろい)の試着体験コーナーがあります。「施設を訪れた記念に…」と鎧を着て侍気分になり、記念写真を撮る見学者もいます。

五感で感じる! 風土資産の魅力

聴く 触る 味わう 嗅ぐ 知る

触る

資料展示室に保管されている鎧は試着が可能。
幕末期にロシアに対する西蝦夷地警備にあたるため、津軽藩や秋田藩の元陣屋が増毛に置かれ、北方警備の要衝となった歴史を思い起こさせます。

知る

郷土資料展示室、図書室、映像体験室などがあり、北方警備の拠点として建設された元陣屋の歴史、増毛の鯨漁の歴史などを学ぶことができます。

■基本情報(R3.5)

住 所：増毛郡増毛町永寿町4丁目49番地
T E L：0164-53-3522
開館時間：9:00～17:00
休 館 日：毎週木曜日(ただし、祝日の場合は前日)
観 覧 料：一般・大学生400円(団体300円)
高校生300円(団体200円)
小・中学生200円(団体100円)
※団体は10名以上、就学前幼児は無料



国稀酒造

暑寒別岳の伏流水が醸す
日本最北の酒蔵

日本最北の酒造メーカーとして、明治15年(1882年)の創業以来、昔ながらの酒造りを継承している「国稀酒造」。創業者は丸一本間の初代として知られる本間泰蔵。当時、鯨漁も手掛けていた泰蔵がヤン衆(鯨漁従事者)に飲ませる酒を自家醸造しようと思いついたのが起源と言われ、増毛郡役所に醸造免許鑑札願いを出し、酒造りが始まりました。この頃、北海道で飲まれていた日本酒の多くは本州からの移入酒で、決して安いものではなかったため、泰蔵は現地での酒造りを決意したようです。

創業時の名称は「丸一本間」。明治35年(1902年)に「丸一本間合名会社」となり、合名会社設立から100年目の平成13年(2001年)からは現在の「国稀酒造株式会社」と改められました。「国稀」の語源はその昔、造られていた「國の誉」という酒を、泰蔵が感銘を受けた乃木希典元陸軍大将の名にちなんで改称したもので、大正9年(1920年)から親しまれている同社の代表銘柄。「国に稀な良いお酒」という意味も込められています。

歴史的建造物としても知られる建物は創業時から10年をかけて完成した木造と増毛産軟石造りの3階建てで、店舗の表入口は大正8年(1919年)に建て替えられています。工場と酒蔵は完成当時のまま今日まで受け継がれています。蔵人たちが仕込みをする酒蔵は太い柱が縦横に張り巡らされた3階建ての蔵になっており、内部は往時の建築技術を偲ばせる重厚な造り。吟味された原料米と南部杜氏の技、暑寒別岳を源とする清らかな水によって、国稀をはじめとするさまざまな清酒が醸されています。

見どころ

酒蔵の内部は年中無休で開放され、誰でも自由に見学することができます。売店や試飲コーナーをはじめ、貯蔵タンクが並ぶ様子も見ることができます。また、近くの倉庫には実際にニシン漁に使用されていた船が当時のままに展示され、貴重な展示物となっています。

ポイント

国稀酒造のこだわりの一つが良質の酒造好適米。兵庫県産の「山田錦」や、北陸・東北産の「五百万石」をはじめ、増毛町産の良質な酒造米「吟風」による銘柄もあり、増毛でなければ購入できない地域限定品も造られています。

五感で感じる！ 風土資産の魅力



聴 現在も酒造りが行われている石蔵からは、南部杜氏と蔵人たちが丹精込めて酒造りをするしめやかな様子を感じることができます。

触 工場手前にある3階建ての石蔵は国稀酒造の歴史に触れられる資料室。樹齢100年を超える道産のトドマツが大黒柱としてそびえ、その周りに酒造りに使用していた道具や酒器、古いラベルなどが展示されています。

味 貯蔵タンクが並ぶ試飲コーナーでは、国稀酒造の全種類の酒を試飲することができます。数量限定の地元限定酒やその年の新酒をいち早く味わえるのは酒蔵ならではの醍醐味。試飲した酒は売店で購入できます。

嗅 増毛は古くから水に恵まれた土地で、北前船は必ずこの地で水の補給をし、航海したと言われています。国稀酒造で使用する水も暑寒別岳を源とする天然水で、水と米、麴が醸す清酒の香りは日本の文化の香りそのものです。

■基本情報 (R3.5)

文化財指定：北海道遺産(増毛の歴史的建造物群)

指定年月日：平成13年10月22日

住所：増毛郡増毛町稲葉町1丁目17番地

T E L：0164-53-1050

営業時間：9:00~17:00

酒造見学：9:00~16:30

休業日：年末年始

入場料：無料

※10名以上の場合は事前にご予約ください



るもい風土資産カード

増毛リンゴ

恵まれた気候風土で育つ
種類豊富な減農薬栽培リンゴ

増毛町は日本最北、そして北海道有数のくだもの産地です。恵まれた気候風土のもと、古くから果樹栽培が盛んに行われてきました。種類もサクランボ、プラム、リンゴ、梨、ブドウなどと豊富で、特にリンゴは50品種以上も生産されています。他産地と比べて冷涼な気候のため、農薬使用量が少なく済むのも特長です。農産物においては、ラベル偽装や無登録農薬の使用など、消費者が不安を感じる問題が頻発する中、増毛町のリンゴ生産者はさらに農薬を少なくして、消費者に安心して食べてもらえるよう、日々研究に取り組んでいます。

例えば、害虫の性フェロモンを染み込ませた針金状のもの（コンフューザー）をリンゴの木に結び付けることにより、害虫はオスとメスの出会いが阻害（交信攪乱）されます。その結果、果実や葉を食べる害虫被害が軽減され、農薬（殺虫剤）散布を減らすことが出来るのです。こうした努力が実り、増毛町のリンゴは全国各地から注文が寄せられるようになりました。

また、町内のほとんどの果樹園に産地直売の施設があり、リンゴがたわわに実る9月中旬から11月下旬までは、名物のリンゴ狩りにもたくさんの人が訪れて、町全体が活気に包まれます。暑寒沢リンゴ地帯を突き抜ける道道暑寒別公園線沿いには、全長約2kmにわたって爽やかな散歩が楽しめる遊歩道の「りんご回廊」が整備されており、人気があります。

見どころ

「りんご回廊」の入り口には大きなリンゴのモニュメントがあり、目印になっています。遊歩道は直線ではなく、もともとあった木をできるだけ残すように設計されているため、多少のアップダウンがあります。散策は花のシーズンと秋のリンゴ収穫期がお勧めです。

ポイント

「一日一個のリンゴは医者を選ばせる」と言われるように、リンゴには食物繊維やリンゴ酸が含まれ、整腸や疲労回復に効果があります。また、活性酸素を除去する抗酸化物質であるポリフェノールが、果肉はもちろん、皮に多く含まれていますので、皮ごと食べることをお勧めします。

五感で感じる！ 風土資産の魅力



増毛町の生産者が創意工夫を重ね、丹精込めて作ったりんごは9月～11月下旬までがシーズン。ぜひ一度家族やお友達と訪れてみてはいかがでしょうか。



恵まれた気候風土のもと生産される増毛町の果物は、全国各地から注文がくるほど。農薬使用量も少ないので安心して食べられます。



町中にはたくさんの産地直売があるため、リンゴが実り観光客で活気付く9月～11月下旬の間は、町中にりんごの甘い匂いが漂います。



増毛町の果樹園地帯は、ニシンの千石場所で栄えた1833（明治16）年に小林吉三郎が小樽で買い、庭に植えた「リンゴの種」を藤原筆吉が関心を持ったのがきっかけ。様々な研究と苦勞を重ね、現在では30以上の品種のリンゴがあります。

■基本情報 (R3.5)

問い合わせ：増毛町果樹協会（JAるもい増毛支所）
TEL：0164-53-2027



るもい風土資産カード

増毛厳島神社

貴重な文化財が奉納される
道内随一の彫刻神社

北海道随一の彫刻神社として知られる厳島神社は宝暦3年(1753年)、増毛場所請負人となった村山伝兵衛が運上屋の守護神として「弁天社」を創建したのが始まりとされています。文化13年(1817年)には安芸国(現在の広島県)の厳島神社から分霊し、明治9年(1876年)に増毛郡総鎮守の厳島神社となりました。当時は港のそばにありましたが、明治14年(1881年)に弁天町4丁目、同26年(1893年)に現在の稲葉町に遷座されました。

新潟県の宮大工らが2年の歳月を掛けて仕上げた本殿は明治34年(1901年)の落成。総檜造り、銅版葺きの荘厳な建物で、新潟県柏崎出身の彫刻師、篠田宗吉の匠の技が随所に生かされています。周囲の壁面は中国の古典から題材をとった彫刻で、鮮やかな木目の仕上がり。拝殿前の鶴の彫刻も精巧な造りで、丹念に掘り込まれた細工の数々に目を奪われます。また、狩野派の画家、勝玉によって描かれた雲龍の天井絵の周りには増毛町出身の日本画家、平子聖龍が手掛けた格子天井絵が施され、四季の花々や鳥などが今も色鮮やかに残されています。

本殿と奉納絵馬7点は、平成30年に北海道有形文化財に指定されました。

留萌管内には他にも羽幌町天売、焼尻両島や天塩町などにも厳島神社がありますが、いずれも海から拓けた地域の氏神として祭られており、航海の安全と暮らしの繁栄を願う地域住民の精神的な支柱として大きな役割を果たしてきました。留萌で最も古い留萌神社は天明6年(1786年)の創建で、ここも海上の安全と豊漁を祈願し、安芸国の厳島神社から分霊されたものです。

見どころ

彫刻師、篠田宗吉は京都本願寺再建の際、副棟梁に選ばれた名工匠。新潟県柏崎から弟子2人を連れて増毛に留まり、2年をかけて完成させたと言われています。篠田宗吉が手掛けた神社は新潟を中心に多数存在しますが、増毛厳島神社は北海道では随一の彫刻神社として訪れる人を魅了しています。

ポイント

増毛厳島神社には保食神(うけもちのかみ)と神龍宇賀之霊神(しんりゅううがのみたまのかみ)も祭神として祭られています。また、「天売島に住む白狐が身ごもり、安産祈願のため海路はるばるやってきた」という伝説から、お産の無事を祈って参拝する人もいます。

五感で感じる！ 風土資産の魅力



毎年7月12日から14日に開催される「厳島神社例大祭」では、「神輿保存会」の若者たちが神輿を担ぎ、町内を練り歩きます。クライマックスの本祭り夕方には畑中町3丁目通りに子供たちの暑寒太鼓が響き渡り、沿道は熱気に包まれます。



ケヤキを使用した本殿内は、荘厳な雰囲気と神社の骨組みを守ってきた古い木材の匂いを嗅ぐことができます。



全国に約500社あるとされる厳島神社の総本社は広島県厳島にあり、通称「安芸の宮島」と呼ばれています。北海道神社庁によると、この厳島神社から分霊を受けた神社は北海道だけで30社ほどあり、留萌管内は特に厳島神社が多い地域とされています。

■ 基本情報 (R3. 5)

文化財指定：北海道指定有形文化財
指定年月日：平成30年3月30日
住 所：増毛郡増毛町稲葉町3丁目38番地
T E L：0164-53-2306
拝 観 料：大人300円高校生以下は無料
※拝観希望は社務所へ連絡のこと。
(事前連絡が確実)



るもい風土資産カード

旧商家丸一本間家

明治時代の栄華を今に伝える
豪壮なたたずまい

道道増毛港線沿いで、ひと際豪壮なたたずまいを見せる「旧商家丸一本間家」。明治時代に「天塩国随一の豪商」と呼ばれた本間泰蔵（1849年－1927年）が、約20年の歳月をかけて築き上げた建物を修繕・復元したもので、平成15年（2003年）には国の重要文化財（建物）に指定されました。建物は切妻瓦葺きに軟石張り、下屋の大開口が印象的な呉服蔵を中心に居宅部、醸造蔵など5棟あり、広大な内部は平成12年（2000年）から一般に公開されています。

丸一本間家の歴史は、新潟県佐渡の仕立屋の三男に生まれた泰蔵が、増毛で雑貨店を開業した明治8年（1875年）から始まりました。明治13年（1880年）の大火で、一度は家財を失うものの、すぐさま立ち直り、呉服商、鯨漁の網元、海運業、酒造業など事業家としての才覚を発揮。建物も事業に伴って増築され、延べ床面積は1237.83㎡にも及びます。老朽化した文書蔵や木造属舎は撤去されていますが、初期建築が完成した明治35年頃の外観や内装は当時のまま維持され、この頃の再現を念頭に復元保存工事が行われました。

出入口から入って右手にある呉服蔵は本間家所蔵の花瓶や食器などの生活用品をガラスケースに収めた展示室で、左手の呉服店舗から奥には中庭をコの字に囲むように居宅部が続いています。明治時代の息吹を今に伝える呉服店舗には反物が並べられ、茶の間には宮大工が作製した神棚も残されています。3代一世紀にわたって守られてきた丸一本間家は、増毛町はもとより、我が国の歴史的建造物として、大切に保存されています。

見どころ

旧商家丸一本間家を象徴する一つが、美しく配列された屋根瓦。その一枚一枚には家紋が彫り込まれ、壁面や門柱には洋風の装飾が施されています。和風の伝統様式に洋風の技術や意匠を取り入れた建物は日本における洋風建築の歴史をたどる上でも重要とされています。

ポイント

居間として使われていた奥の間では、滋賀県出身の書家、巖谷一六（いわや・いちろく、1834年－1905年）が襖に揮毫（きごう）した漢詩を見ることができます。巖谷一六は明治の三筆の一人。美しく、迫力ある襖の墨書はしばし眺めていたい貴重な作品です。

五感で感じる！ 風土資産の魅力



約20年の歳月を掛けて建てられた豪壮な町屋様式の建物。床がぎしぎしと鳴る音を聴いてみてください。



重厚で美しい石造りの外観に使われているのは、増毛と浜益の海岸沿いにある日方泊産の軟石。淡い黄色みを帯びた軟石に触れると、当時の石工たちの思いが伝わってくることでしょ。



初期建築が完成した明治35年当時のまま維持されている内装からは、当時の生活臭が漂ってくるような感覚が味わえます。



丸一本間家が建つ道道増毛港線沿いの通称「ふるさと歴史通り」は、旧JR増毛駅を起点としており、木造3階建て元旅館「富田屋」、映画「駅 STATION」のロケ地となった「風待食堂」（現在は観光案内所）などが点在し、増毛町を代表する観光ガイドコースとなっています。

■基本情報 (R3.5)

文化財指定：重要文化財/北海道遺産（増毛の歴史的建造物群）
 指定年月日：平成15年12月25日/平成13年10月22日
 住 所：増毛郡増毛町弁天町1丁目27番地
 T E L：0164-53-1511
 開館期間：4月下旬～11月上旬
 開館時間：開館10:00～閉館17:00
 休 館 日：毎週木曜日（祝祭日は前日）7月・8月は無休
 入 館 料：大人400円（団体300円）
 高校生300円（団体200円）
 小・中学生200円（団体100円）
 ※団体は10名以上、就学前の幼児は無料



るもい風土資産カード

旧増毛駅前 の歴史的 建物流と旧増毛 小学校

増毛の歴史を今に伝える
明治から昭和初期の木造建築群

増毛の町内には、あちこちに明治から昭和初期に建てられた木造建築が残っており、その時代にタイムスリップしたような不思議な感覚が味わえます。とくに旧増毛駅を起点とする通称「ふるさと歴史通り」には味わい深い建物が数多く点在しています。

増毛町は大正期に、港湾、鉄道の整備が進められ、交通の要衝として栄えました。特にニシン漁の最盛期には貨物輸送の拠点として賑わいましたが、これらの建物は、その恩恵にあずかった商家、旅館、店舗、造り酒屋、住宅などで、当時の栄華の様子がうかがえます。中でも、明治時代に「天塩国随一の豪商」と称された「旧商家丸一本間家」は、ひと際豪壮なたたずまいを今に伝えています。

また、同じ本間家が明治期に創業した「國稀酒造」の建物は、明治15年(1882年)の創業時から10年かけて完成した木造と軟石造りの3階建てで、工場と酒蔵は当時のまま受け継がれています。さらに、日本海を見下ろす高台に建つ旧増毛小学校は昭和11年(1936年)の建築物で、2階建て校舎と体育館は、道内最大規模の木造校舎として、平成24年(2012年)3月まで使用され、現在はイベント時などに内部公開されています。

他にも「駅(STATION)」のロケ地となった「風待食堂(現・観光案内所)」、昭和8年建築で木造3階建ての「旧富田屋旅館」。昭和7年建築の現役旅館「増毛館」などが歴史的街並みを形成しており、こうした歴史的建物流と旧増毛小学校は、平成13年(2001年)に北海道遺産に選定されました。

見どころ

「旧商家丸一本間家」の建物内には花瓶や食器など当時の生活用品が展示してあります。國稀酒造の倉庫にはニシン漁に使われた船も展示しています。

ポイント

旧増毛駅前周辺は明治期から昭和初期に建てられた建造物が立ち並び、レトロな雰囲気が味わえます。平成13年(2001年)には駅前通、商家、造り酒屋、旅館と旧増毛小学校の建物全体が、北海道遺産に選定されています。

五感で感じる！ 風土資産の魅力



鱈漁で栄えた明治・昭和初期頃の栄華は、旧増毛駅前周辺の旅館、店舗、造り酒屋、住宅などの建築物に今も垣間見ることができます。豪勢な佇まいの建築物に触れてみましょう。



歴史的建造物群の並ぶ街並みを歩くと、國稀酒造からただよう豊かな地酒の香り、古い建造物独特の刻み込まれた歴史を感じる香りなど感じることができます。



昭和11年に建てられた旧増毛小学校の校舎は、現存する木造校舎としては道内最大規模。原風景的な存在感で迫る木造の校舎は一見の価値あり。

■ 基本情報 (R3. 5)

【旧増毛駅前の歴史的建物流】

文化財指定：北海道遺産

指定年月日：平成13年10月22日

【旧増毛小学校】

住 所：増毛郡増毛町見晴町120

T E L：0164-53-2174



増毛山道

商人が私財を投じて切り開いた貴重な歴史遺産の道

増毛山道は、日本海の海岸部の増毛郡増毛町別荘と石狩市浜益区幌を結ぶ道路です。この山道は、江戸時代末期にロシアの南下政策に備え、当時、増毛の場所請負人の商人であった伊達林右衛門が松前藩の命を受け、自費で開削したもので、「北海道」の名付け親である松浦武四郎が調査で足を踏み入れた際に、「蝦夷地第一の出来映え」と評するほどの完成度だったと言われています。

その後、増毛山道は地域の重要な交易道路として利用され、駅通も設置されていましたが、交通網の整備が進むと、次第に山道の利用者が減り、昭和43年には地図からも消えてしまいました。

しかし近年、その歴史遺産としての価値が注目されるようになり、「NP0法人増毛山道の会」の活動によって復元作業が進められました。そして、平成28年に平地を除く32kmにわたる山道の全線が復元され、その歴史が甦りました。

北海道が蝦夷地と呼ばれていた頃に、アイヌの人たちが利用していた道、和人が交易のために利用した道、ロシアの南下に備え整備した道が道内各地にありましたが、時代とともに山道の役割は失われ、維持管理されないまま荒れて失われていきました。そのような中で、山道全線が現在に遺され、復元できた増毛山道は希少な山道であり、歴史的な価値は大きいのです。

五感で感じる！ 風土資産の魅力



開削から160年の歳月を経て、その踏み跡も3mを越すクマザサの中に埋没し、この地に生活し道を辿った古老達の多くが亡くなり、増毛山道は記憶の彼方に消え去ろうとしていました。山道の全線復元により、往時の姿のまま現代に遺された貴重な歴史遺産に触れることができるようになりました。



「増毛山道の会」が収集した衛星利用測位システム (GPS) のデータを基に、平成29年に国土地理院電子地図へ増毛山道の位置情報が掲載されました。



増毛山道鳥瞰図

見どころ

平成28年に復元された増毛山道は、現在、一般開放はしていませんが、案内ガイドの同行により、夏期から秋期にかけて体験トレッキングを開催しています。体験トレッキングでは、山道に今も遺る電信柱や水準点などの歴史遺産を実際に見ることができます。

ポイント

明治40年頃、増毛山道には17点の1等水準点が設置されていましたが、約160年を経て復元された山道に、そのうちの9点を発見することができました。北海道内に存在する約2,400点の1等水準点のうち、最も高い位置にあるのが、山道内の浜益御殿 (1,038m) 頂上付近にあるものです。

■ 基本情報 (R1.5)

文化財指定：北海道遺産(増毛山道と濃曇山道～近代化に先駆した開拓遺産とその再生)
指定年月日：平成30年11月2日
所在地：増毛郡増毛町別荘～石狩市浜益区幌
全長：38km
復元完了日：平成28年10月16日